

# 時間と歴史表象

ミュージアムにおけるその表現の試み／阪神大震災を中心として

寺田匡宏

Time and Historical Representation: A Museum Experiment on their Representation; Centered on the Great Hanshin Earthquake

はじめに

- ① 展示における震災―何が展示されたのか、その構成と目的
- ② 時間と歴史表象  
おわりに

## 【論文要旨】

時間はどうのように表現されるのだろうか。

本稿は、これを歴史を対象とするミュージアムの展示に即して考察するものである。一般的に、時間は過去から未来に向かって流れると考えられているが、はたしてそう言えるのだろうか。時間には、流れる時間もあるが、流れない時間もある。それは、ミュージアムの展示ではどのように表現されるべきなのだろうか。

具体的には阪神大震災を素材にこの問題を考える。二〇〇三年、国立歴史民俗博物館において「ドキュメント災害史一七〇三―二〇〇三」という展示が開催された。私はこの展示において阪神大震災コーナーを担当する機会を得たが、そこでの経験をもとにこの問題を考えることにする。

震災後の時間の流れ方は、三つにわけられる。一つ目は、災害後の亀裂のような、断裂のような、空白のような時間であり、これはごく短期間で終了した。続いて、災

害ユートピアとも災害の「生命期」とも呼ばれる時間が二―三ヶ月続いた。この時間にはボランティアが活躍した。そして、第三に、災害が記憶の中で保存される時間であり、この中では過去の出来事はさまざまに変形され、痕跡を通じて伝えられた。

これらは人間の時間認識の多元性、複数性を示している。そのような時間認識のメカニズムは、リニアな時間とそうではない時間、時間の入れ子構造、リアリティとアクチュアリティなどの側面をもっている。

ミュージアムにおける歴史展示は、これまで、そういった多元的な時間のあり方をかならずしもうまく表現してきたとはいえない。多元的な時間認識にもとづいた歴史表象が求められている。